シンポジウム「農業現場が求める病害虫防除の情報とは何か」
Q&A

Q： 過去に比べ最近では普及指導員から得られる有益な情報が少なくなった理由は何なのでしょうか？　普及指導員に足りないのは何でしょうか？

A：担当指導員次第ですが、実需者にとって有益な情報を数年入手できないこともあります。篤農家が求める情報は、タイムリーな薬効情報はもとより、新たな技術，そして天敵を利用する農家の場合には、補完防除の必要性の見極め、薬剤による防除が必要な際の剤の選定です。知識・経験は未熟ながらも貪欲にチャレンジする指導員を求めます。

Q： 会計年度任用職員の方にお願いしている防除所の調査業務の内容を教えてください。

また、会計年度任用職員には、調査業務に求められる見識・経験等が必要なのではないかと考えますが、どのような方を任用、資質向上や技術レベルの平準化等について、どのような対策を講じられておられるのでしょうか？

A： 会計年度任用職員の方には、定点（場内圃場）での野帳書き、試験場内外での圃場作業などの補助をお願いしています。その他、実験室内では徐々に覚えてもらって培地づくり、菌の分離作業（クリーンベンチ内)、ガラス器具の洗浄及び消毒（オートクレーブもマニュアルどおりに使ってもらう）等を実施してもらっています。国の研究機関のパート職員が高いレベルであることを参考に、機器使用のマニュアル等をつくりながら会計年度職員にも覚えてもらい、レベルアップしてきた経緯があります。

病害虫発生調査そのものは、基本研究員が行いますが、予察調査業務のうち、病害虫防除員に対しては、基本毎年研修を実施して、調査レベルの平準化を行っています。

Q：予察データを受けて生産者に農薬散布のアドバイスする際に、効果が無かった等のネガティブなフィードバックを受けることの無いよう、少し安全をみて散布農薬の種類を増やしたり、散布頻度を上げたりすることはあるでしょうか？また、散布コストと効果のバランスを取るための極意などありましたらご教授ください。

A：生産者に対して農薬散布による防除を指導する際には、防除技術上の合理的理由をもって農薬の種類、散布回数等を決定いたします。

予察情報での推奨農薬を選定する場合には、登録上、その作物でその時期に使用できる剤であるということは当然として、防除効果や薬剤感受性の程度、その時期に同時防除が想定される他の病害虫、天敵・受粉昆虫類への影響等、個々の場

面に応じて最適と思われる 1 ないし数剤を選びます。これに加えて、個別の農家に直接指導する際には、農家で保有している農薬の在庫、栽培規模、複合で栽培しておられる他の作物での使用の可否、普段購入される店舗（JA か農薬商かホームセンターか）なども聞き取って判断材料とします。この際、防除効果の観点から必要のない混用を勧めることはありませんし、展着剤も含めて必要性のない混用はしないよう指導しています。

散布回数については、基本的には 1 回を前提として指導します。生産者にとって農薬散布は大変過酷で辛い作業ですので、余計な防除を勧めることはありません。もちろん、病害虫の生態や発生状況によって、1 回散布だけでは止めきれないと判断した場合は、1 週間後の追加散布を指導する場合もありますが、その際は、異なる作用機構を有する薬剤の使用を提案しています。

指導する際に留意することとして、生産者から病害虫防除の相談を受けた際は、当該病害虫に登録のある薬剤のリストを並べて良しとするのではなく、対象病害虫の生態に応じた散布の時期や狙い所、噴口の種類、撒き方など、防除効果を最大限引き出すのに必要な情報と、さらに今回の発生の原因を分析して次作以降に注意すべき点を加えて伝えるように心がけています。

散布コストと効果のバランスについては、基本的には防除効果の観点から指導しています。安くて効果の中途半端な薬剤を何度も散布するよりは、高くても確実に止められる薬剤をまず勧めます。散布コストと効果のバランスは、その時点での経済的被害許容水準をどこに持ってくるかという話になると思いますが、収量の減少や品質の低下からくる心理的・労働的被害も考慮すべきと考えています。経営上どのように判断するかは生産者によりますが、資材コストや労働時間だけでなく、「安心感」の経営評価が必要ではないかと考えます。

Q：いちごの観光農園で使用されている天敵は、具体的にどのようなものを使用しているのでしょうか？

A：ハダニ類に対しチリカブリダニ、アブラムシ類に対してはアブラハバチを使用しています。観光農園では、農薬の使用をできるだけ少なくする必要があります。天敵の使用にあたってはハダニ、アブラムシ類の発生を早期に発見し、適期に放飼することが必要です。